

金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(三)

—京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照—

関本真乃

本稿は、前号(『京都大学國文學論叢』第四十号)所載の拙稿(「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(二)」——京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照——)の続きである。前々号が上巻、前号が中巻、今号が下巻の約半分相当、五三丁目までの翻刻である。

〈凡例〉

- 一、字体は通行のものに統一した。
- 一、本文丁数については、丁のはじめに(二才)のように示し、改行は「」で示した。
- 一、見せ消ちは、朱の場合 あいう、墨の場合 あいう で示した。朱字書き入れは「」、墨字書き入れはゴシック体、紙片の貼付であることは「」で表した。ただし、貼付紙片に見せ消ちを意味する記号が書き込まれている場合、「ヒ」のように示した。
- 一、判読不能箇所は「■」で表した。
- 一、京都市歴史資料館蔵本との校異箇所は□で囲んで示した。
- 一、底本が空白かつ京都市歴史資料館蔵本が空白でない箇所は「網掛」で示した。

一、濁点を表さない「リ」や、「〇」「(」等についてはできるだけ忠実に「リ」「〇」「(」等で示した。

一、貼付紙片のみがある場合は あいう のように示した。

一、貼付紙片が訂正を示していると思われる場合、 あいう のように示した。

一、貼付紙片のうち、親本の字を真似て書き、本文上部に貼付たものは省略した。

(一才) 苔ころも下「月日のゆきかふるにしたかひては殿うへ
なとゆく あ なき人の御事こひしく」かなしなんといひ出聞え
たまふたち「ゐにつけていたはしうみるかひありし」御ありさ
まをいかなる所に い かやうに「しておはすらんかはり給ひたら
ん」すかたをたに ゆ めのうちにもみまほしう「風あらくしも
雪のふるにつけても」やすきそらなくふたところのたまひ「(一
ウ) あはせつゝ御ころもおしますなきたまふ」さまいとことば
りになし年もかはり「ぬれは ■ くれといまめかしき」
ことにつけつゝあたらしきとしとも「いはすふりおつる御涙ひ
まなけなり」いまはかひあるましき事なれば少将」をたにおと

な／＼しきやうにみなし世の中をもゆつりつゝいとかはかり
うかりける世をも思ひすてんといそかはしうおほせはな
けきの中にもつゝみなに(二才)三位の中將になし聞え給ひつ
きしに(三才)はくらかなる空の気しきさすか宮をとおほしや
られて殿うへはいまは「おほしなくさみやしつらんなどおもひ」
やり給ふそむかしおほし出られて谷深みかゝるすみかも
鶯のこゑは都にかはらさりけり」とひとりこち給ふまことや二
の宮の御けんふくは春とおほしたれとおとゝみやなどのい
たくおほしりたれば「なに事もはへなくて冬つかたになりぬ」
(二ウ)こうきてんの宮なにとなくわつらひたまふを内もい
と心くるしくおもひ聞えさせ給へはつねにこまやかにとふし
ひ聞え給ふいとおとろ／＼しくあらぬ御こゝちなれはたゝ
きこえむにはたれもよふけにはたまはしとかゝるつゝめで
にいかにしてほいとけんとおほし」とりて目をへて大事にな
るよしをのみもてなし給へはうへもさかのゝ院にもいかに
とおほしなかせ給ふ(三才)日かすふるまゝにわか御こゝ
ろにもいとよは／＼しうおほえ給へはうちなんとの「わたり
給ひつるにもやつしすてんとのみ申給ふにもいとあるましき
事」といさめ聞えさせ給ふゐんなんとはまことになにかはな
か／＼此ありさまにてもなからへてものし給へかしなとおほ
せはさかの院へむかへ聞え給ふにうへもをとろへにたり日比
のけにやことの「外にやせ／＼になり給ひて今すこし(三ウ)
あへるにおはするをあはれにおしく見奉り給ひてうちしほ
れ給ひぬ」さかのゝ院には年比のおほつかなき「などに御なみ
たのひまなくうちなき」つゝみ聞えさせ給ふ日かすつもと
御こゝちをこたり給はねはつゝに山」のさすめしてけむか

せ給ふをさしあたりてはいとあはれにかなしうおもひ聞え
給ふ宮はおほしするほいかなひてひた／＼うちにいとうれし
くおほされ(四才)つゝ御こゝ地もことの外によろしく成
てやう／＼おこなひ給ふ大殿には三位「中將月日にそへては
おとなしくなり給ひてあさましきまでむかしの御」おもかけに
にたまひつるのみにすこしの御こゝろなくさめなり母宮など
は「かきりあるわかればかなしといへとも」なをよのつねのこ
となりかしさるへき「ことにや月日にそへてなくさむ事も」あ
りゆきかたしらぬ御なけきはやるかた(四ウ)なくそつきせ
す覚しいられたるまことにやあさましき人たかへにて中納
言にとられ給ひし「の宮のうへ」はことのをりふしにつけて
はためし「なかりける我身のうさのおほししら」れてよとにも
に覚しなかせし「きにやかひなき御いのちさへみしかく」
てほとなくうせ給ひし「そかしわれあや」まちなるこゝろして中
納言はよろつ「のことなとさし聞え給ふまゝにいと(五才)
うつくしきをかなしき物にし給ひし」かところやすくみをき
給ふ事もな「くうせ給ひしかは少納言のめのとなく」／＼むか
へとりてわたくし物に思ひ「つゝいかにせましとおもふにこ
うち」のおとゝのおとゝはらの姫君を式部卿の宮のうへにたい
の君とてつけ聞え給ひつるはこはうへにはをはにおは「す
るそかしさるへきゆかりありて少納言かゝる人もあつたふ
とき／＼(五ウ)むかへとりつゝいとあはれにあつかひ「給
ふなるへし中／＼みやのうへなどには「かくとも聞えすよろし
き人のこゝろ」くるしうてもちたりしをしる人に「せんとてむ
かへとるなと聞え給ふに「姫君のかたちもいらうたけに「な
つかしきさまなれはうへもたれも」あはれにいとおしき人にし

給ふことし」十七に成給ふほと姫君はいつより宮」もうへもかしつき給ふにそこのたいの」(六才)をは母しるにつけ聞え給ひたりける」わかきとちにて姫君もおなしやうに」あそひなれ給ひてかたみにあひ思ひ」つゝそすき給ふ秋にもなりぬれば殿」はあしたかのへまたあつきにもさむき」にもゆく多なき人の御心いつわすれ」給はすきてもいまはとよになしやな」かたまひぬらんまたおはするにても」いかなるらんたんとくせんにとらおほ」かみをともしとしてすこし給ふらん」(六ウ)今はやう／＼けのたもともものな」れ給ひぬらんかしなと人わろく恋しく」ゆかしく覺し出ぬればたゝ今のこと」のやうに二所のたまひあはせつゝか」なしとおほしたり三位の中將は」いますこしもおとな／＼しくと覺し」てなをしものに中納言に成給ひぬ」神無月もやう／＼すきぬれば二のみ」やの御けんふくとておほしいそき」たりみねにもかくけはしきすまひ」(七才)なれとさすかに月日のかはるはしら」るゝ事なれば花のさき葉のおつる」につけてもしきやうむしやうの」かねのこ多御身にしむ心ちし給ふ」心なき草木もをりにつけたる虫」のこ多／＼にも心をそめてあかしく」らし給ひしを覺しいつるによしなく」くやしくてかゝるすまひはなをうれし」さをきところなくおほさるゝまゝには」さむきよな／＼は霜雪をかきあつめ」(七ウ)あつきひるまはたにの水をむすひ」つゝあしせんにつかへ給ふそれゆへそ」かしと覺しいつるそせんちしきのち」きりも此世ひとつならすかた／＼あき」からすおほしめされて」さやうけんき」きよのあやまちをかへしてとはか」なくきえにし人をさんぶつぜうの」いんととふらひ給ふけにやゆめなど」にもことのほかにたのもしきさま」にてみえ給ふ此あしせんははゝう

への」(八才)御はらからに中つかさの宮のうへにて」物し給ひし人はこのおとゝのあにの」そつの大納言のうせ給ひし人の御」むすめそかしかの御せうとにてかく」もんのかたなどもめてたくいはれ給」ひしに俄にたうしんをおこしてふ」かきたにそこにこもりゐたまひつ」るをしる人なかりけりかたみにしか／＼」と聞あはせ給ひては身にしらさらん」人よりはいとあはれにかなしく覺し」(八ウ)けりかくて霜月に二の宮の御けん」ふくの目にもなりぬれば何事も今」めてたきことのみおほかり御かとも」中宮も御こゝろをつくし給ふことなればいかてかをろかなるへき御ありさま」たとへんかたなし春宮はあまりな」まめかしううるはしき御ありさまな」るにこれはやうかはりて御こゝろより」はしめたゝすゝろにみまほしきけし」きにし給ひつるひやうふ卿の宮と」(九才)聞ゆる姫君なども物し給はねは」たゝ此大將殿姫宮をそまことの」いもせのやうに思ひかはし給ひたる」はかなきことにつけても夜ひるなれ」あそひ給ふさまかたみにいとをかし」年月はかなくゆきかへりつゝ中納言」十六になり給ひぬいとゝ御年のほと」よりもことの外にしつまりおとなしく」みえ給へは何事もをしゆつり聞えん」にうしろかたからしとおほきおとゝも」(九ウ)見聞給ひて大納言になし聞え給ひて」大將かけ給つ姫君はやう／＼さかりた」ち給ふまゝにたゝこうへの御かほをうつし」をきたらんやうにおはすれば御かと」も中宮もいみしきひかりと覺し」つゝ心ことにもてなしかしつき給ふ」兵部卿の宮はをとなし給ふにしたか」ひて此姫君の御さまを見給ふにいと」あらまほしくなつかしくのみおほすかた」みにおさなくものし給ひしとは何となく」(一〇才)あそひ給ひつゝすき給ひしにやう／＼御こゝろつ

くまゝにあれにをとりた」らん人をえたらんは世にあるかひなく「くちおしかりぬへけれとやう／＼覺し」なるそわひしきやさりとてさはか」りうちとけつゝかゝるころものへたて」あらんと露おほしたえぬに中／＼かく」と聞えいてゝと思はずにこゝろうしと」思ひうとまれんこそあやなかるへし」けれとなと人しれすなめかちにあん」(一一〇ウ)せられ給ふをはしり給はすはゝみや」などは春宮のたの女御なんともいたく」をとなひてすさまじくのみし給ひつゝ」此姫君をえまほしくおほしたると中」納言のすけのかたりしにさらはさも何」るへきにや大将なともさやうにおもひ」給ひてこそおもひゆつりけめと覺し」給ひて此春のほとに御もきありて」夏になりて参り給ふへしとていそき」給ふを兵部卿の宮は人しれす口おしく」(一一一才)物思はしくのみなりまさり給ふやよひ」の十日比なんでんのさくらつねよりも」おもしろきを宮ひとり見給ふもあかす」覺されて一枝をりて姫君の御かたへ」もてわたり給ふたればことに人もなく」て中将のめのとむすめないしといふそ」さしのそきてあたる姫君はしやうの」こと引すさひ給ひけるとみえてをし」やられたるにさくらしほにやまふきの」ほそなかにつねの色なれときなし」(一一二ウ)給へる人からにやなへてならすなつかしう」みゆるよりふし給へるに宮おはす」れはうち見おこせたまへるまゆひた」ひつきおもやうなとゑにかくとも筆」もをよふましきをれいのむねうち」さはきてみ給ふすこしおきあかりて」とり給へる手つきなとたとへんかたな」くうつくしけるにしのひかたくて」人しれす思ひ忍ひてけふやさは深き心のほとを知せん」とて御かいなをとらへつゝゆるしきこえ」(一二一才)給はねはいと心えすむつかしくてう」ふし給

へるかみのかゝりかんざしなと」なをたくひなくそおほさるゝに中将」のななしも物こしらへにうちやすみ」たるにやと見給へはかばかりのひまは」いつかはと覺して年比思ひむすほれ」つる心のうちのとけかたさをはいとよく」いひつゝけ給ひつゝしつめかたけなる」御けしきを姫君はたゝひとみに」おそろしくうとましうおほえたまふ」(一二二ウ)かはかりの心のへたておほくものし」給ひける人を何こゝろなくうちとけ」聞えのみすこしけるよあやしく思ふ」へき人／＼などにもと／＼はなれはてゝ」かくものはかなき身の有様なればこそ」あるまじき心つかひもし給へなど」浅ましうおほされてなき給ひぬる」をみすしらさらん人のやうにいとかく」まておほさるへきかはと宮はいとつらく」おほされてかひなきことゝもをのみ」(一二三才)の給ひつゝけ給ふに中将のめのとの」こゑにて御まへには人もさふらはぬか」ないしの君は何し給ふそといへはたゝ」いまは宮のわたらせ給へはこゝにうち」やすみてなとこたふる人もあやしうや」みんとおもひつゝさしそき給ひぬ」姫君はありつるさまにてふし給へるを」中将のめのとなと御とのこもらせ給ふ」たるかとてさしよりつゝ見聞ゆれば」御かほもいとあくまてくるしけにて」(一二四ウ)ふし給へるにこゝちなとのれいさま」ならぬにやといたくわひしと思ひ」たり廿日は御もきとていとめてたけ」なり大宮は宮なともまゐりてみ」奉り給ふにもこん大納言とのゝ御」ことを覺し出られてこといみもえし」あへたまはすかはかりのほたしとも」をふりすてゝ思ひとり給ひけん心」つよさよなを／＼うらやましくおほさ」るをひたち給ふまゝにひとへに母君」(一二四才)にておはすることをは宮は一かたなら」すあはれにみ給ふ御もきはてぬれば」一

すちに春宮にまゐり給ふへき御「いそきなるを人しれぬ御心の内には」いまはいかにものかれ給ふましきに「こそとくちおしくおほさるをおなしくは」なと御身のほとおほししられて心うきむろのやしまのけふりのめかし「そめたまひてのちはおり／＼につけて」いとつきなき御心つかひみたまふに「(一四ウ) 姫君はなをいと思はすにうとましかり」ける御ころかなおさなくよりかたみに「かきりなくまことのいもせのやうに」たのみ聞えたるにかくのみ心のへた「てありてうちとけにくゝ思ひ聞ゆるも」いとあやなしされはとてむかしのやう「にうらなくはえもてなしきこえしと」そのゝちはまれにさしむかひ奉るた「にまはゆきにとそおほされける宮も」此御氣しきを見しり給ひてかきり「(一五才) なくつらくおほされていかはかり聞えしと思ひかへし給へとかなはさきりけり」月日にそへてもものうとくのみもてなし「聞え給ふにしたかひてはあやにくなる」御ころつかひのまさるに姫君もいと「くるしうわひしうおほされでさしも」思ひ給はさきりし春宮の御事もいそ「かはしくなん思ひ給ふいづれもおなし」御ことなれとさるへきさまに宮うへも「覺しをき給へるにかやうの事もより」(一五ウ) 聞えてはいかに思はずにころえす「おほされぬとむつかしうわひしう覺す」なるへし宮は姫君の御まゐりもちかく「なるまゝにいかにせましと御心もうき」たちにおほさるれとなにかひもなし「ひま／＼をまかせて此世のちのよいみ」しきことはをつくしてなきかなしみ「給へとなにのしるかあらんいまは」いかなりとてもゆるきなくさたまり「たることゆへにひたふるならん心つかひも」(一六才) まことに人の御ためいとおしかりぬ「へくさはかりうるはしきとくうの」御心にひんなきさまに思はれ

奉らんも「わかため人のためによしなかるへければ」さすかにをしたらたる御心もえつ「給はすされはとて思ひすて給ふ」ことはいかにもえあるましくおほし「こかるゝそ心くるしき御まゐりのほと」になりぬれはいとゝおとろ／＼しき「まておほしいそきたりさはかり大」(一六ウ) 殿中宮御かとの御心をとゝのへつゝ「いとなみ給はんにかてかをろかなる」へきかくてその目にもなりぬれは「いとのきはかしきやうにてれいの」かひなきことをたにえいひしらせ「給はぬ御心のうちはやるかたなくくるし」きに御くるまよせたれは人／＼もたち「のきてのりにおはするを御そのすそ」ををしひかへ給ひて「けふやさし別れはてめる同じくは命も友に限りてし哉」(一七才) とて忍ひかねつゝいみしうなき給ふ御「氣しきのさすかに心くるしくもお」ほさるゝにいまはかはかりの事も「きかまほしきそかしところやす」く思ひ給ひて「別れちを惜むとならはよそにても命も友に限らさらなん」といひけち給ひてやかてのり給ひ「ぬるを人わろくめつらしくおほえたまふ」にもいかてかをろかならんいまはとお「ほしてかはかりのなさけをかけ給ふそ」(一七ウ) いますこしのおもひのつまなる春宮は「女御の御有様をとに聞たまへるにも」やゝたちまさりてまたしきにすきま「なくもてなし聞え給ふ中宮大殿など」にもいとうれしく思ふさまにおほさる「かゝるにつけてもひやうふ卿の宮の」いまはをとなひ給ひたるにひとりのみ「すこし給ひつゝなめかちにおはする」も心くるしくていかにと覺しあつかふ「ほとにしきふ卿みやのかしつきの姫君」(一八才) を氣しきたち給へはいとよき事「とてみかともきさきまきやうにとお」ほしたるを宮はつらき人のいつしか「さたまりかほによそなか

らも聞給はん」ことのねたくもはつかしくもありぬへけ」れは
ものうくのみおほされて人し」れぬ御かたおもひはまめやかに
くるし」う成まざる世の中もあちきなくすき」ましくもてなさ
れ給ふを母宮などは」いと心えぬ御なりやといさめたまふか」
(一八ウ)くるしくおほさるればたゞいかに」まかせ聞えす
き給ふさもあらは霜月」はかりときため給ふなるへし思ふ給ひ」
し事なれば春宮の女御はあさまし」きまてときめき給ひて
すこしの御いとまもゆるしかたくてそのうちいて」給ふ事もお
さ／＼なければよそながら」たに見聞え給ふことのなきを宮で
おもひしことそかしとおほせとなをいと」世の中もつらくあち
きなくおもひ」(一九オ)みたれ給ふさまさばかりへたて給は
て」おさなくよりならひ給ひたれば大かた」につけたる御文な
とはあしかるへき事」ならねと春宮の御心のあまりうるはし
きやうにてさやうの事もゆるしなく」おほしぬへきわつらはし
さに思ひより」給はすさるは大かたの御心をきては」いとあり
かたくおほしいるゝおり／＼」あるへしせめてのなくさめには
ありし」よりもこよなく春宮へそしけく参り」(一九ウ)給ふ
されとも女御の御たいめんなどは」おほしもかけす此中將のな
いしに」つけつゝ大かた成御せうそこ計奉り」給ふもいとゝむ
ねいたく御心はみたれ」まさり給ふかはかりこと／＼しくなん
とはいつかたにつけてももてなし給ふ」ましけれどをり／＼に
つけてはしのひ」かたかりし御氣しきのこゝろうさを」覚しい
つればさはかりふるめかしき」御心にもし給ふ事霜月の一日
比は」(二〇オ)ひやうふ卿の宮しきふ卿の宮はわた」り給ふ
へければいつれの御かたにもお」ほしいそきたり宮はいと物う
くむつ」かしくのみおほさるれとそのよに成」ぬればこゝろに

もあらずしたてられて」参りてわたり給ぬ御有さまいたく」あ
いきやうつき見まほしき御にほひに」て思ふ事なけにものし給
ひし人の」いともうけにのみ覚していか成にか」此ほとゝ成
てはななめかちにてこゝろ」(二〇ウ)ゆきてもおほしたゞさ
りける御」氣しきをはゝ宮は心くるしく何事を」おほすらんと
やすきそらなく覚さる」しきふ卿の宮にはかひありて待よろ」
こひ給ふさままはゆきまてなり姫」宮のあり様あてやかにわか
ひなよ／＼」としてむけにみるかひなくはみえた」まはねと思
ひそめたまひにしむろの」やしまを覚しいつるにはいてやとう
ち」うめかれぬへくそおほさるされとも通ひ」(二一オ)そめ
たまひぬればめやすきほとに」もてなしつゝそすき給ふ年も程
なく」かはりぬるに二月斗にきさきの」宮の御かせにやなやま
しくし給へるか」俄におもひ給ひていとくるしけに」見え給へ
はわれも／＼と覚しおとろ」きたり春宮にもきやうけいありて」
みたてまつり給ふ女御の君はやかてと」まり給ひてよろつにあ
つかひ聞え」給ふに兵部卿の宮も此ほとはこゝにそ」(二二ウ)
ものし給ふなに事にもまつ御さいは」ひのほといみしけなりさ
ま／＼の御」いのりのしるしにほとなくをこたらせ」給ひぬれ
はとうくうにも女御をとく」とくとこゝろもとなくおほしいら
れた」れはいまこのほにそ参り給ふへき」むかしにたちかは
りたるこゝ地して」かくていましはしあらまほしく覚す」ひや
うふ卿の宮は御なやみのまさき」にほのみ聞え給ふにこの月比
おほつ」(二二オ)かなくてすき給へるめつらしきにやいま」
一しほひかりそひたるやうにみえ給ふ」を御むねくるしくなり
給ひていとゝあ」ちきなく御心ちもあらぬまておほさ」るれと
さりぬへきひまをうかゝひた」まふに宮の御こゝちもよくなり

はてゝ「こよひはうへの御つほねへまいり給へは」めつらし女御の君はへたてたるかたに「御とのこもと聞給ひてもしやとかひ」まみありき給ふに中将のめのか（二二ウ）こゑにてわかき人／＼いとにてさふ「らひ給へつほねにしはしよふなる事」ありており侍へりぬるに夜ふかさて「そまいり侍へきこゝしはしかけ給ふなど」てつまとをしたてゝゆくもうれしとおほしてそのあたりにたちやす「らひつゝ聞給ふに人／＼もねいるにや」をとせねはやをらあけてしのひ「つゝわけいりてみまはし給ふにたれも」／＼みなよくねにけりうれしと覺すに（二三才）心さはきしなからきちやうのうしろのかたよりはいり給ひぬれと目ころのくるしさにや女御もよくねいり給ひて「とかむる人もなければやをら御そを」ひきのけてそひふし給ふにそうち「おとろき給ひてあやしとおほしたるに」まきる／＼くもなき御氣しきなれば「いとこゝろうくてあさましくこゑも」たてつばかりなきまとひたまふを「ことはりなからまたいとかくまで思ひ」（二三ウ）さけ給ふへき事かはとめさましくさへ「おほえ給ふにわか御こゝろもしつめ」かたくて思ひやりなきやうにのみ「もてなし給ふを女御はたゝゆめちに」おほるゝ心ちしてたけき事とは「なきかなしみ給ふさまいはんかたなし」れいのかきりなきことはをつくしつゝ「ちきりかたらひ給へ」といとかくまで「ちかづき奉りぬることの心うさよ」たゝ時のまにもきえうせなまほしく（二四才）おほえ給へは何のかひかはあらん日比「よそ／＼に思ひつるよりもいましほ」のちかまさりに又はいつかこれほどの「ゆめの中のたいめんもと覺しつゝ」るにいまきはのなきそひぬる「心ちしてひとつなみにおほれ給ふ」さま御身もうきぬ／＼しさはかりもの

さはかしき中にもつゆまところみ給へるにや御ゆめにとめてたくうるはし「くさうそきたるわらはのこれなん奉」（二四ウ）るへきものとて此世のものともみ「えずひかりかゝやく玉をかりの枝に」つけて奉るをいとめてたしと覺し「てもち給へるに此女御の君そはより」あへなくとりておほしぬるをいとあ「さましきことかな春宮の御物にこそ」はならんすらめなにしにとられ奉り「ぬらんといとねたしとおもひて見はて」給ひてうちおとろき給へるに鳥も「たひ／＼なけはいとゝあやなく覺え給ふ」（二五才）なからありつるゆめをかたり聞え給へと「何のかひかはあるへきかゝるほどに」ちかく人のなく氣しきのすれは中将「のななし丁のまへにふしたるかうち」おとろきやをらさくり聞ゆるに「おと」この氣しきすれはものおほえすあ「きれまとひてまいりつゝいか成人なれば」かくおほけなきこゝろつかひ給ふにか「とて忍ひつゝ聞ゆればいかにかくおに」などのいりたらんやうにそこにさへ（二五ウ）うとましけに思はれたるにかとのた「まふ氣しきをたゝきなりときゝ」奉るにたれはかりならんとおもひ「つるに心すこしおちあぬるやうな」れとあなあさましくうぐうのきはか「りものはつかしたにおはします御」心をのつからもり聞え給ひたらん「にいかはかりおほしあやめきこえ」給はんとなきぬはかりに覺ゆるに「まして女御の君のおほしりたる」（二六才）さまはことはりにいとおしくをしは「かり聞ゆるに夜もやう／＼明るにや」と聞ゆるにあさましくたゝいたき「も出奉りぬへくおほえられ給ひつゝ」いてもやり給はす心くるしけなる「御氣しきなからいたく明行もはした」なくうつしこゝろもなきやうにて「たち出給ふに」

みつせ河今一たひのあふせたに思絶たる中ぞ悲しき」と聞

え給へとかひもなし中将のな」(二六ウ) いしにかへす／＼か
たらひ給ふ御氣しきは「心くるしからずしもなけれと世の中の」
おそろしくして「てのみおほゆれは」とくいたし聞えむの心のみ
ふかくて「ことうけをやすらかにしつゝいたり引」かへさるゝ
心ちしなからありしつゝ「まとより出てわか御かたにうちふし」
給ふもうちつけにこひしく忍ひて「覚え給ふそいと浅ましきに
中将は」かへりてやをらさくり奉れば御身も」(二七オ) うき
ぬはかりになきぬらし給ひつゝ「るに御袖のしづくなどの人めあ
やし」かりぬへければあらぬ御そともきせ」かへたてまつりて
さりけなき御ま」にてふしぬ女御はたうかりける御」身のす
くせひとかたならす思ひしられ」給ふるにもきく人なかりつる
御ゆめ」かたりをおほしいつるにたゝいはん」かたなくおほし
いりあけはてぬれは」御かうしまいらせわしたし中将のめのと」
(二七ウ) いまそまいりてよへあまりにねふ」たくてやかてふ
しにけるこそいと」おしけれなといままで御とのこもら」せた
るにかと申つゝまいりよりて御か」ゆなんとそゝのかし聞えて
御そひき」やりたれはいみしくくるしけにて」御かほもいとあ
かきを見おとろき」奉りて中宮の御かたへもかくと聞え」たれ
はいとおほしきはきて御いのり」なとせさせ給ふ宮は御心もほ
れ／＼し」(二八オ) きまであくかれまざり給ふなくさめ」に
もやと御ふみかき給ふことほりも」すきて見すしらさらん人の
やうに」おほしいたりたりつる御氣しきのうら」めしさを思ひす
てまつらぬ心よはさも」心うくて」相坂もこゆともなしに
立歸さもふみまといもせ山哉」引むすひてないしかもとへい
ひしらす」かすめつゝこれなんひまにとてなかに」入てひきか
くしてうかゝひありき給へは」(二八ウ) 女御のくるしうし給

ひてひまなけなり」きさきの宮もこの御かたにおはするほ」と
になれは大きなるやうにて御とふら」ひにまいり給ひつるに
もわかあやま」ちなるこゝちし給ひてせらおそろしく」おほさ
るゝわりなきひまにありつる」ものをえさせ給へればつほねに
て」忍ひつゝ見れはいかならんものゝふ」もなひきぬへくかき
つゝけたまへるに」さすかにあはれに心くるしくうち」(二九
オ) なけれなかなかなるをは引かくし」てもてまいりたれ
はすこしとまりて」中納言のすけの御かたはらにさふらふ」か
はらんといふにまきれよりてかくな」むとて見せ奉れば御そ引
かつかせた」まひていとこゝろうしとおほしいらた」れはやか
て引かへしつ宮はないしか返」事たにねたくつらくおほさる
かく」て二三日にもなりぬれはいたくあさ」ましかりしなこり
のくるしさに」(二九ウ) こそのし給ひしかやう／＼すこし」
よろしきやうにみえ給ふに春宮は」またとくとのみまいらせさ
せ給へは」さやうにもなと覺したれとまた何」となく御心ちよ
からすひやうふ卿の」宮はありしはかりのまきれもやと」ひま
をもとめ給へとそのゝちはつゆは」かりのひまなし女御もこゝ
ろえ給ふ」たれはいとおそろしくてよろしき」さまにもてなし
つゝまいりたまひぬ」(三〇オ) 大殿は大将のいまはよのかた
めなとし」給はんもこよなかるましきほとにな」り給ひたれは
いとこゝろややすく覚え」てほいとけなんのよしをうちにも」た
ひ／＼そうし給へとあるましきよし」をのたまひつゝゆるし聞
えさせ給はぬ」を御かせにやすこしれいさまならぬやう」に覺
え給ふにつあとけ給ひぬれは」大将殿くはんはくのせんしかう
ふりた」まふうへもおなし／＼やつしたまへは」(三一ウ) 中宮
などもあはれにおほされつゝ」出給ひて見聞えさせ給ふかやう

にそ」むかせ給ひぬるもかつは此ゆへそかしと」おほすに妙莊嚴は淨藏淨賢の神」通をおほしとられてせんちしきも」いまそうれしくおほさるゝかた御心」にもなをありなしたにもしらぬわか」れはかなしく覚え給ひてつきせず」しほたれ給ふひやうふ卿の宮は有し」ゆめのかの今すこしなけきむりつみつ」(三才)めやすくふるまひ給ひし式部卿の宮」のわたりにもえつくろひあへたま」はすあくかれまさりつゝつねには」きさいの宮にのみさふらひ給ふわり」なきことよりはをつくしてすこしかた」きをり／＼は中将のないしにをとつ」れ給へと露そのしるしもなくてわた」くしの返事をたにまれないと」ねたう心うくおほさるまことや式部卿の」宮のたいの君もてあつかふあね君を」(三才ウ)さりぬへきをり／＼み給ふにあやしう」らうたけにこめかしきまみのわた」りなとつねなき人におもひよそへられ」つゝすへて中／＼さうしみの心は」(三才)つきてあはれにおほえ給へはわり」なくひま／＼に忍ひつゝかたらひ給」ふを女も御きそくのなつかしきに氣」にくゝも思ひたらぬものからいみしう」世をつゝみたるさまなどのなれ給ふ」まゝに見まさりしてのみおほせは」(三才オ)おもひやるかたなき思ひのまきれには」またれぬる人もあるへしうへはあくま」て御心もほとけたるやうにてまねな」るよな／＼などをいかにとおほし」とりたることさらにほしたうた」くなよ／＼としてうらなくうちかたら」ひ給ふさまに中／＼にさるかたにあは」れにみたてまつり給ふはうへしも」かやうの事をもいたくおもひとかめ」けなるそおそろしきかくて春宮の」(三才ウ)女御のありしのちも御心よからすほとへ」ぬるをしはしあさましかりし御心」まとひのなこりにやとおもひしに」けにいか

なるへきにかとわか御心にも」こゝろよくおほさるゝにれいの御事」などもなくて月ころへぬるを中将の」めのとはさにこそとこゝろうるにいと」うれしくてきさいの宮にも忍ひ」てかくとけいすれはおほしよるこ」ひつゝ御いのりなとやう／＼はしめさせ」(三才オ)給ふに中将のないしは人しれす心ひ」とつに思ひあはする事あればかは」とりのちきりにておはししける」よとあきからすあはれにて御ふみ」などのあるにもわたくしの御返りは」かりはこまやかに聞えさすやう／＼」日かすもつより世の中にもれきこゆ」れはひやうふ卿の宮にもありし」ゆめのこゝちをかそへ給ふにもさなり」けりとおもひあはせられてひとかた」(三才ウ)ならすあはれにかなしくおほさる月」日はかなくゆきかはりつゝ春宮の女」御のまち給ふことも此月なれば世の」中いと物さはかしけなり十日御けし」きある道おほちの馬車のをとも」物聞えぬまてなり大殿にてせさせ」給ふいたくなやみつゝほとふるにそ母」みやをはしめてさはき給ひたるう」ち春宮の御つかひあめのあしよりも」しけしひやうふ卿の宮は大かたの御」(三才オ)いそきにことよせてこれにのみさふら」ひ給ふ殿御としのほとよりもこよな」くおとな／＼しくて御らんしをきて」たまふにつけてもゆくゑなき御こと」うちそへてものしたまはましかはい」かにいましほの色まさりてみえたま」はしとつきす聞えぬ人なしまして入道」とのなとはことよりはの御なみたなかれぬ」をりなくみえ給ふひやうふ卿の宮の」御かほをうつしとりたるやうなるおとこ」(三才ウ)にてそさし出給へるたれ／＼と覺し」よるへき事ならねはたゝとうくう」のあまりなまめかしううるはしきこ」とは人よりもことにみえさせ給ふ御かた」ちなどはあなかにすくれてもの

し「給はぬに宮のまたいとみまほしく」あいきやうつきたる御さまなれはさし」こしてにたまへるにこそとうつくしみ「聞え給ふに中将のないしはかりそ」おもひあはする事まきれ所なけれは「(三三才) 人しれすあはれにみ奉りてなみた」こほれける女御はあやにくにいちし「るき御かほつきをいとこゝろうくお」ほされてあへなく見奉り給ふたひに「わか御かほあかむ心ちし給ふ春宮は」聞せ給ひておほろけならず覚し「よろこひたり御うぶやのきしきあり」さまはたゝきさきの宮の御おりに「かはる事なし女御はなこりもいとよか」らぬやうにおほされながら日比にも「(三五ウ) なりぬれはやう／＼よろしくなり給ひ」つく／＼とおほしつゝくるになをいと「こゝろうかりけるちきりかなとかな」しきはかり覺しをきにたる事の「春宮などもあらまほしくの給ふに」やすらかにわくかたなく心きよき」ことにもなくてゆめちにおほえられし「しるしによくしもまきれところ」なきさまをさはかり心うるはしく「ものはつかしけなる御心をきてに」(三六才) をのつからこゝろえ給ふこともやなど」とにかくにおほしむすほるゝなからへ」てすこきは心よりほかにこれより「のちもかゝることもやとおほすに」かねて水のあはともならまほしく「おほさるさりなからもかはかりなり」けるちきりおはすに此世ひとつ「ならす覚ししられける兵部卿の宮は」わかみやのわかかけに似給ひたるを「見給ふにも心のおに、御かほたかふ」(三六ウ) こゝちはし給ひながらあはれにかなし」くてなを人の御のものになしはて給ひ「ぬるをありしゆめのうちおほしあ」はせられていと、御むねくるしうさ」きの世のちきりうらめしくおほさる」れいのかひなき御ふみをそ忍ひかき」給ひて御なくさみにはし給ふ女御の「みやには」

種まきし人をわするな雲のまておひのほるへき「峯の若松」とはかりかき給ひてないしにそいと」(三七才) こまかにてかはかりあさからさりける「ちきりのほとをおもひけち給はん」こそなか／＼「みふかけれ此たひの」御返事をはかまへ給へなとかへす／＼「かき給ひて忍ひてつかはしたれはひ」まにてもてまいりわたくしのおもみせ「聞ゆるにわか御心にもものあはれに」おほさるれと心しりかほにこれにし」もおちふらんも心うくてうちそむき「給ひぬるをなを此御返りはかりは」(三七ウ) ひとくたりとあなかにそゝのかした」てまつれは」うかりける契りとなれる松なれはおひ行末もみややははつへき」と聞ゆへくもなくのたまひけちてひき」かつかせ給ひつゝおほしもかけねはかひ」もなくて引かくしつゝをりぬれはれい」のむなしきことにて待るとかくなん」のたまへるなどないしかはこまやかなるを「これさへむつまじくてうちもをかれ」すみ給ふけに人わろき御心にも式部」(三八才) 卿の宮の忍ひ所にはいとあはれに「御心にかゝりつゝあひみぬ日かすのへた」たるもこひしくおもひ出られ給ふ「かきりなきことなどにはあらぬと只」一すちにらうたくよの中なとをい」たく思ひつゝみたる物からなつかしくう」ちなひきたるさまと見すてかたく」心くるしく覚え給ふはまことにすく」せといふものゝおはするにやと母上の「かやうにおほしたるをしはしこそな」(三八ウ) けのすまゐにともおほししるまゝや」かにのみなりまさりてつねにまきれ」より給ふを心つきなくおほしたれは」うへなどへもはか／＼しくさしいつること」もなくてつほねにつく／＼となかめ」ふしつゝむかしいまの我身のあり様」おもひつゝくるにいと物ははかなく心」うかりける身のほとかなかはかり」なるへき身の

ほとかはなとおもひしられ給ひてなかめかちなるにこの「(三九才) 春つかたよりこゝちさへれいさまならず」覚えていとくるしければまことにかく」をきところなきにひさしかるまし」きそとおもひむすほれつゝもの」なともみいれ給はねはたいの君そ」よろつにもてあつかひ忍ひつゝい」のりなとせさせ給ふ宮の御心さしは」ありしよりけにまさるやうなれば」女もさすかにあはれにおもひつき」奉りぬこの御心たゝならぬさまなり」(三九ウ) ければいとゝいかにせましと心ほそく」なみたのひまなくてすきたまふ宮は」此氣しきいと心くるしくみたまへはか」かるあたりをとりはなしていつち」／＼もいてかくしつゝ心やきつれ／＼」なくさめにもうちかたらひてすきま」ほしくおほせとまた御心ならぬ事」こそあらめかやうの事に心とめて物」めかしくもてあつかふと聞給はんつれ」なき人の御こゝろのうちも御心ときめ」(四〇才) きにはつかしくねたければたゝいま」しはしはかやうにてとのとめ給ひたり」宮のうへはおさなくよりおもひかはして」あそひなれ給へる御なかなればかく」てさしいつる事なともかたきを心」つきなくなとは露おほされてひた」みちに心おさなきやうにてあはれ」にいととおしくおほさるればわりなき」ひまは忍ひつゝこまやかに御ふみを」かきてかよはし給へと母うへのいと」(四〇ウ) きはたけくていとゆるしなき事に」おほしむつかりたるわつらはしさをはゞ」かりつゝすき給ふいとゝこのこゝちのさま」をもり聞給ひてはたいの君までも」心つきなくへたておほかるやうにもの」したまへは女君はかすならぬ身のをき」所なくうき身のゆかりにこの人さへ」かくわつらはしけなるよとたゝときの」まにきえうせなまほしきに何ゆへか」はと宮なともつらく覚え給へと

わりな」(四一才) くまきれやりつゝあさからすうちかたら」ひていとあはれにおほしたる氣しき」のかなしさにひとかたにしも思ひすてら」れ付給はすもゆく多しらまほしけに」おり／＼につけての給へはむかしの人に」にすうかりける身のほとをのこり」なくいひしらせ奉んもこゝろよくて」たゝ此たいの君のしたしきにてか」すならぬやうにいひなしたるをこれ」よりわれはとおもひあかりたるきは」(四一ウ) の人にもさしも心とまる事もなきに」けにしかるへきことにやととにかくに」あはれにおほさる月日にそへて世の」中の氣しききひしくのみなりま」されはかくてさふらふもいとつゝまし」くて二月はかりにさとへいてぬ宮は」さとをしり給ひたれはいますこし」わつらはしき事もなくてつねに通ひ」給ふ此人のゆへにいさなはれつゝこそ」しきふ卿の宮わたりにもわすれぬ」(四二才) ほとにみえ給ひしか物むつかしきわたり」にいとゝたちよらまくおほされてこよ」なき日かすなとのふるをはゝうへはいと」と覚しむつかりたり兵部卿の宮はかく」かくたゝならぬさまを見給ふにもちぎり」あさからすおもひしられ給てまたしき」に忍ひつゝいのりなとせさせ給ふとうくうの」わか宮くちおしくよそへにみなしたるに」これをわたくしものにもてあつかはま」ほしく覚え給ふさもあらは此さんのつゐ」(四二ウ) てにそきさきの宮なんとに申しらせて」むかへとらんとおほしけりまことや春宮」の女御はひまなくいそかせ給へは三月やは」つれ／＼なるにときさきの宮」おしみとゝめたてまつりてやしなひ聞え」給へは兵部卿の宮もみ聞え給ふにわか御」すくせ心うくちきりくちおしくおほし」しるなつかしき御有様を見しりかほに」まいり給ひぬれはつきまとはれたまひ」つゝおよす

け給ふまゝにまきれ所なく」(四三才)しかるへき事となみたくましくおほさる」人しれぬ女君は月日の過行にしたかひ」てなれあそひたまひし姫君の御心なつ」かしくなに心なかりしとおもひ出られ」て人こそあらめかやうなることゆへさへ」こもりいたるよとかたはらいたくはつかし」くおもひ給へと目にしたかひてはふみ」など忍ひてかよはし給ふことたにたへ」にたるそ思はずにいかにおほすらんと」こゝろうかりけるはうへなどのいたく」(四三ウ)ゆるしなくむつかり給ひてたいの君」をも心すきなくのみおほしておさへ」ものなんとをもの給ひかけぬうさをうちなきつゝ女君にはいひしらせてお」さなくよりかきりなくおもひならはし」聞えたれはいかなるとても御心つゆを」ろか成へきにはあらねとこれにかへて」おはするもわつらはしくのみ聞ゆるこそ」いといみしけれわれものをのつからしり」かほしたるところも何らはいてかくし」(四四才)聞ゆへきにあまたわかゝりしほとに」思ふへき人へき人にもをくればてゝ」またいかにといふへき人もなくて此うへ」につき聞えたれは心えずとそむきた」てまつられ奉りて大かたにはいとたのもし」き心さまにてものし給へとかやうの事」をいたくとかめ給ふにこそそれもこと」はりなきにしもあらずまへの母君をは」こ右のおとゝとのうへは此うちにおとゝに」ものし給ひしかはむかへ聞えてまたなく」(四四ウ)かしつき給ひしほとにそつの宮を」はむこにとりたてまつりたまへりしそかし」されともほんいなきことゝもにてあり」しにいとゝおもひよらさりし人にぬす」まれ給ひてゆく多もなくあとかたなき」やうになり給ひしことをあさましく」覺しなきて此宮のうへをたにか」て此はちすゝくはかり見なし聞えん」とおほしたるにか

くあともとゝめ」給はずにおほしむつかりたるにこそ」(四五才)宮の御心さしは日をへてあさからすこそ」みえさせ給ふにいとゝかやうなることさ」へものしたまへはいかなりとてこのとの」外なることはよもものし給はしなかへ」忍ひてさらはむかへとり給ひてよかし」などもてあつかはしけにうちなけきつゝ」の給ふをきゝたゝひとへにうき身ゆへに」この人にさへかくものを思はすることかなし」くてつくゝとなきふし給ひたるさま」のいとうつくしうらうたけなるにまち」(四五ウ)給ふこともちかく成たれはにやいとくるし」けにてうちおもやせたまへりしもくるしけ」なるをいとゝあはれにはゝなどおはせは」いかばかりあはれに見聞え給ふまなし」さはかりかなしくしたまひしものをと」おもひいてられてわれもうちなかれぬ」とかくいひなくさめてたいの君おくの」かたへいりぬるにたゝひとりつくゝと」むかしいまのことおほしつゝくるにいか」なるさきの世のちきりにていひかひ」(四六才)なくてさし出けるより人にも心うき」ありさまにてたれにもおほしなけ」せつゝ父などいふ人のゆく多をたにしらて」あかしくらすらん少納言のめのかいひ」しらせし事まことにはいとおやし」かるへき身のほとかはさもはかへしから」さりけることにもおほしうとまれてか」きりなくあはれに覺したりし母君の」おもかけはほのへ」おもひ出らるゝもいと」かなし今しはしたになとかなかへて」(四六ウ)おはせさりけんそれも明暮は物をのみ」覺したりしけるにやみしからさへものし」給ひけるよいとかくものはかなきさ」まにて思はぬほかの人へ」にあつかはる」るはなをうかりけるちきりかなとおほ」すにたゝなくよりほかのなくさめそな」きかやうの事を聞給ふにしたかひては」

心ちはいますこしあしうのみなりまさ」るやうに覚えていかにもひさしかるま」しき身にこそと心ほそきものから」(四七才) いてやかうかりける身をなからへあらん」こそ人」の御あたりもくるしかるへけ」れときま」思ひつ」けられたまへと」心より外にはいひあはする人たになき」ころほそさはやるかたもなしやうにて」あるもわつらはしけなりしのはいかに」してもうき身をかくさん山のあなた」を思ひまはせとさやうにしり給ひた」る人もなをむかしの中納言のめとか」あねのみよしなる所に世をそむきて」(四七ウ)ゐたるかもとへ小大夫なとかとき」ものいひかはすをまき給ひてかくい」たゆるしなけるほどかしこに」し忍ひかくればやとなん思ふとの給ふ」を小大夫はあるへき事とおほえすか」はかり宮のあさからす思ひ聞え給へる」御心さしをふりすて」はいか成事侍」りていかてかたちかくれさせ給ふへき」またいかさまにもわか御身」となりて」こそはかやうの事も侍へらめといひな」(四八才)くさめ奉りつ」すくるほとにけに日に」そへてはありにくける事ともに」のみなれとさすかに宮なとはひたすら」むかへとりつ」もてかくさんなども覺し」た」ねはかやうの事をこま」とも」え聞え給はすしはこそ小大夫もいさめ」しか誠に世の中にもいとあちきなき」おり」もあればすみよしへのひて」いひやりたるにかへす」よろこひつ」少し納言のめとかなとか今のはほかまても」(四八ウ)申をき侍」りし事わすれすなから」何となくてすき」るにとく」わたら」せ給へとかきたるをみせ聞ゆれはうれ」しきものから又ひとかたにも思ひとら」れたまはす八月十日あまりのころに」むかへにたてまつるへきよしなといひ」たるにつけても何とな

くみたれまさる」心ちにそいとくるしき宮はかやうの事」をもちかてしり給はんれいのまたぬ」ほとの日かすにはたちよりつ」音つれ」(四九才)給ふ月かけに御かほりなどのなつかしきにもいまいくかさしとかすへられつ」心のうちにはあはれやるかたなきに」つ」みあへぬおり」もみゆるをみやはいとあやしと覺してかゝるおりにいたく」ものを思へはおそろしき事にてあ」るものをとあやうけにおほしたりれい」の此世のちの世きりかはして月日に」そへてはあはれにのみおほしめさる」中」にもかく物おもはしけるあり様を」(四九ウ)とり」いひなくさめとひ給へとた」心ほそきやうにもてなしていかてか」かくとも聞えんかゝるわたりをさそひ」ていてものせまほしう思へと今しはし」しのはやと思ふことあればこのくるしき」ことなとたいらかにみなし聞えてさやう」にもものすへきなとこまやかにかたら」ひ給ふにいとあはれいまいくよあるへし」とおほすにそせきとめかたくあはれ」やるかたなくて」(五〇才)ともすればきえをあらそふ露の身を今いくよとてたのめをくらん」と大かたなるやうに忍ひやかにいひけち」たるをけにいとあはれにおほされて」たのめをく程をもまたす露の身の消なん跡を悲しかるへき」とてなをこのことくさこせいと心うけれど」の給ふかゝる気しきも心くるししとてこの」ほとはつねよりしけくわたりつ」み給ふ」にた」かきりなきさまにこそあらねと」いかにそやおもひみたれたる気しきあり」さまなどのらうたく心くるしけにかみ」(五〇ウ)などともいたくおほくあらぬものからた」けに一しやくはかりはあまりたらんかし」とそみゆるすちもすへきさやかにかん」さしか」りなとはかきりなくいみしからむ」きはにもをと

らすそみゆるおもひ入」たるさまをとかくなくさめつゝちとせをかさ」ねてちきり給ふ氣しきのなへてならず」なつかしきにも心ほそせんかたなし」かくてすみよしにちきりしほとにも」なりぬれはいかにのたまへし事は覺し」(五一オ) めしかへすかあすのくれつかたなさんと」おほしたるにそのほいこそかなはさらめ」をきところなく心うき身のゆかりに」わつらはしくはつかしきみ」をのみ聞せ」奉るよいま一とたに御心のとかに見」聞えさんこそいとかなしかるへけれゆく」ゑなくまとはしていかに思ひ給はん」されはとてかくといひてもなにの」かひかあるへきうき身ゆへにはしはしこそ」なけき給はめあけくれわひしきめを」(五一ウ) みせ聞えんよりはとさま／＼に覺しつゝ」けて袖のしからみもせきかねつゝ身のう」きぬる心ちし給ふに雨さへいと物むつか」しくふれはみやこはこよひはよもまき」れたまはしいま一たひたにあひみたて」まつらてとひとかたにしも思ひたゝれす」こゝちもいますこしあしきまておもひ」みたれてやかてはしつかたうちふしたま」ひぬ兵部卿の宮は此ほとゝの氣しきは」ことにうしろめたくおほさるゝに雨の」(五一オ) ひまなきをいと心つきななくかめくらし」給へど露をやみもなけれはおほしたへ」たるにいか成にかつねよりもこひしく」覺し出られてわりなく忍ひつゝまきれ」おはしたるを女君もおもひよらさりつ」れはことにあはれにいま一たひのた」いめんあるへかりけるちきりのほども」あさからすそおほさるゝ宮は覺しやり」つるを」したくはしつかたにいとあはれ」けにふし給へるにつねよりけなる袖の」(五二ウ) したくをいかにかくのみはおほゆるにか」まことにひさしかるましきにやと覺」さるあらましもうたて覺え給ふ」みちのほ

といたくぬれ給ひにけりと」みゆるにふせやのうちはいとゝ所せき」まてなる御にほひもわか身にしみぬる」心ちするにいとあはれにこよひは」かりにこそ此もてなしかはらずはあらめ」いかにしはしはあへなくあはれともお」ほさんと人の御心の内までおもひやられ」(五三オ) つゝはか／＼しうめもみあられすもり」いつるなみたを心えたまふやうもやと」しみてねんしかへす心のうちやるかた」なしむつかしかりつる雨もなこりなく」やみて十日あまりの月は陰やかにさし」出たれはほとなきにはいとゝくまなきに」袖うちかはしつゝやかてはしつかたに」ふしたまへる月かけのつねよりもあい」きやうつきなまめかしくみえ給ふをこそ」にてたにもいまはいつかはみ奉るへき」(五三ウ) さすかにことの外ならぬ世のつゝましき」はかりにひかれてかくとたにいひしらせ」奉らてゆへなくいたつらになりはてぬや」きにこそとおほすにこほれそめぬる」なみたはえとめもあへせせきかたけなり」袖のしからみを宮は見給にそゝるに」かなしくてわれもうちなかれたまひぬ」なくさめわひつゝたゝゆくすゑをのみ」かたらひ給ふをきくそいますこしあは」れやるかたなき女君はまち給ふことも」

「付記」貴重な資料の翻刻をご許可くださった金沢大学附属図書館に御礼申し上げます。

なお本稿は科学研究費助成金若手 (B) 『『吾の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成』(課題番号 16K16774) の成果によるものである。

(せきもと まさの・北海学園大学人文学部講師)